

## 食物アレルギーによるアトピー性皮膚炎乳児 におけるアレルゲン除去食の意義についての 検討

伊藤 節子

**要約：**卵アレルギーによるアトピー性皮膚炎乳児における卵除去食の意義をアレルギー・マーチの進展の予防という観点から検討した。その結果、一旦アレルギー症状を発症した場合でも生後6カ月までにアレルゲン除去食を開始することにより、皮膚症状が速やかに軽快するのみならず、食餌療法の種類と期間が最小限度に抑えられ、しかもダニRASTの陽性化や喘鳴発症に対しても予防効果があることが明らかとなった。

**見出し語：**食物アレルギー、アトピー性皮膚炎乳児、アレルゲン除去食、アレルギー・マーチ進展の予防

(目的) 昨年度の報告書で、乳幼児期のアトピー性皮膚炎乳児における食物アレルギーの関与の実態について調査し、食物アレルギーがアトピー性皮膚炎の症状の修飾に関与するのは乳児期および幼児期にみられる特有の現象であり、年長児になるに従い、ダニアレルギーあるいはその他の非特異的因子の関与する割合が高くなっていることを報告した。そこで本年度は、食物アレルギーがアトピー性皮膚炎の原因となっていることが多い乳児を対象として、アレルゲン除去食の意義をアレルギー・マーチの進展という観点から検討した。

(対象および方法) 対象は卵アレルギーが関与したアトピー性皮膚炎の乳児のうち3歳まで経過観

察できたもので、除去食開始の時期により2群に分けた。6カ月までにアレルゲン除去食を開始した41例を「早期除去開始群」、6カ月から1歳までにアレルゲン除去食を開始した28例を「後期除去開始群」とし、対照として軟膏塗布などの対症療法のみをうけて、1歳を越えてからアトピー性皮膚炎を主訴としてアレルギー外来を受診した36例をとり、「対症療法群」とした。これらの3群に対して、経時的に喘鳴の有無のチェックと、卵白、牛乳、大豆、小麦に対するRAST測定、血清総IgE値の測定を行った。

(結果) 3歳時における喘鳴発症率を表1に示す。早期に診断し、アレルゲン除去食を開始する程、

医仁会武田総合病院

3歳時までにおける喘鳴発症率が低くなっていた。

3歳時における卵白RAST陰性化率を表2に示す。早期除去開始群では半数以上の51.2%の症例でRASTスコアが0となっていたが、他の2群では陰性化率が低く、感作期間が短い程、陰性化しやすいことが明らかになった。また喘鳴の有無との関係でみると、喘鳴のある群では陰性化したものは25例中1例のみで、逆に、卵白RAST陰性化例27例中、喘鳴がみられたのは1例のみであった。

3歳時における卵白以外の食物アレルギーRAST陽性化率を表3に示す。早期除去開始群では3歳時までには新たな食物アレルギーが成立したものは14.6%のみであったが、他の2群では半数以上に新たな食物アレルギーが成立しており、いずれの群においても喘鳴のある群の方が喘鳴のない群より陽性化率が高かった。

3歳時におけるダニRAST陽性化率を表4に示す。早期にアレルギー除去食を開始する程、ダニに対するRASTの陽性化率が低かった。喘鳴の有無との関係でみると、喘鳴経験者のダニRAST陽性化率は100.0%であった。

3歳時における血清総IgE値を表5と表6に示すが、早期にアレルギー除去食を開始する程、血清総IgE値の平均値は低かった。喘鳴の有無との関係でみると、喘鳴のない群の平均IgE値は喘鳴のある群の平均IgE値に比べて有意に低かった。ダニRAST陰性例はいずれの群も早期除去開始群に匹敵する程の低値を示していた。

尚、早期除去開始群と後期除去開始群とにおける背景因子の差をみる目的で、アレルギー家族歴と6カ月時の栄養法とを調査し、表7と表8に示した。早期除去開始群の方が、アレルギー家族歴

の陽性率が高かった。6カ月時の栄養法をみると、全例、母乳、または混合栄養という形で母乳を摂取していた。

(考案) 乳児期および幼児期早期のアトピー性皮膚炎の成因には食物アレルギーの関与する率が高く、その中でも卵が原因となっている場合が多い。そのため、母乳栄養中の乳児の中には直接的に卵摂取を開始する前より卵によるアトピー性皮膚炎を発症するものが少なくない。そこでこれらの卵アレルギー児におけるアレルギー・マーチの進展の様相が卵除去食開始の時期により修飾を受けるかどうかを検討したところ興味ある結果が得られた。即ち、早期のアレルギー除去食の開始は、早期の皮膚症状の軽快をもたらすのみならず、IgE値の上昇を防ぎ、他の食物アレルギーの成立、ダニアレルギーの成立、喘息発症に対する予防に役立つという結果が得られた。また、早期除去開始群と後期除去開始群との間にみられた差は、前者が後者に比べてアトピー素因が少ないということから生じたものでないことは、前者の方がアレルギー家族歴陽性率が高いことから明らかである。従って、乳児期に発症した卵アレルギーによるアトピー性皮膚炎の経過は、アトピー素因を持ち、一旦アレルギー疾患を発症した場合のその後のアレルギー・マーチの進展に及ぼす食物環境を含む環境因子の影響を調べるよいモデルとなると考えられる。この観点から今回検討した結果をみてみると、生後6カ月までがその後のアレルギー・マーチの進展を阻止する上でのcritical periodであり、乳児期早期のアレルギー除去食の実施により新たな食餌制限の必要が生じることを最小限度にすることができ、しかも喘息発症の予防につなが

りうと結論できる。

表1 3歳時における喘鳴発症率

	喘鳴なし 例数(%)	喘鳴あり 例数(%)
早期除去開始群 (41例)	40 (97.6)	1 (2.4)
後期除去開始群 (28例)	22 (78.6)	6 (21.4)
対症療法群 (36例)	18 (50.0)	18 (50.0)

表2 3歳時における卵白 RAST 陰性化率

	喘鳴なし	喘鳴あり	全 体
早期除去開始群	21/40 (52.5%)	0/1 (0.0%)	21/41 (51.2%)
後期除去開始群	4/22 (18.2%)	0/6 (0.0%)	4/28 (14.3%)
対 症 療 法 群	1/18 (5.6%)	1/18 (5.6%)	2/36 (5.6%)
計	26/80 (32.5%)	1/25 (4.0%)	27/105 (25.7%)

表3 3歳時における卵白以外の食物アレルギー RAST 陽性化率

	喘鳴なし	喘鳴あり	全 体
早期除去開始群	5/40 (12.5%)	1/1 (100.0%)	6/41 (14.6%)
後期除去開始群	11/22 (50.0%)	5/6 (83.3%)	16/28 (57.1%)
対 症 療 法 群	9/18 (50.0%)	15/18 (83.3%)	24/36 (66.7%)
計	25/80 (31.3%)	21/25 (84.0%)	46/105 (43.8%)

表4 3歳時におけるダニ RAST 陽性化率

	喘鳴なし	喘鳴あり	全 体
早期除去開始群	9/40 (22.5%)	1/1 (100.0%)	10/41 (24.4%)
後期除去開始群	15/22 (68.2%)	6/6 (100.0%)	21/28 (75.0%)
対 症 療 法 群	17/18 (94.4%)	18/18 (100.0%)	35/36 (97.2%)
計	41/80 (51.3%)	25/25 (100.0%)	66/105 (62.9%)

表5 3歳時における血清総 IgE 値(平均±SD)

	IgE(U/ml)
早期除去開始群	115.4 ± 168.2
後期除去開始群	1363.5 ± 3210.8
対症療法群	2130.0 ± 4693.0

表6 3歳時における血清総 IgE 値

	IgE(U/ml)			
	ダニ RAST 陰性例		ダニ RAST 陽性例	
	例数	平均±SD	例数	平均±SD
早期除去開始群	31	90.9 ± 157.6	10	191.2 ± 185.8
後期除去開始群	7	133.6 ± 97.6	21	1773.5 ± 3704.6
対症療法群	1	102	35	2187.3 ± 4821.8
計	39		66	

表7 アレルギー家族歴

	早期除去開始群	後期除去開始群
二親等以内	30/41 (73.2%)	18/28 (64.3%)
四親等以内	4/41 (9.7%)	2/28 (7.1%)
なし	7/41 (17.1%)	8/28 (28.6%)

表8 6カ月時の栄養法

	母乳栄養	混合栄養
早期除去開始群	36/41 (87.8%)	5/41 (12.2%)
後期除去開始群	21/28 (75.0%)	7/28 (25.0%)



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:卵アレルギーによるアトピー性皮膚炎児における卵除去食の意義をアレルギー・マーチの進展の予防という観点から検討した。その結果、一旦アレルギー症状を発症した場合でも生後 6 ヶ月までにアレルゲン除去食を開始することにより、皮膚症状が速やかに軽快するのみならず、食餌療法の種類と期間が最小限度に抑えられ、しかもダニ RAST の陽性化や喘鳴発症に対しても予防効果があることが明らかとなった。